

「論の流れ」をつくるための指導 —「だからといって」をめぐる—

金子比呂子

(1997. 10. 31 受)

はじめに

中級レベルの文章表現指導においては、論文などが書けるようになるための前哨として、日本語による論の展開のし方の指導が中心となる。特に、大学に入り、日本人学生と伍して、いわゆる知的活動を展開していかねばならない東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下「センター」）の学生に対しては、知的表現活動の要ともいうべき、論の流れをつくる指導を行うことは必須である。⁽¹⁾

一方、初級レベルでは、総合授業という形態で基本文型の習得に収斂するよう設定されてきた文型教育も、中級レベルになると、次第に語彙の教育と談話の流れをつくる教育とに分岐してくる。後者は具体的にいえば、状況に応じた適切な反応のし方とか、ある目的を達するための適切な対応の仕方などの指導とともに、大学に進む学生の場合、自分の考え、意見を支える論の流れをいかにつくり、どう表現するかという方法の指導となろう。つまり、論に筋を通すためにどんな文型で支えたらいいのか、論理の整合性を保つためにどんな述べ方をすればいいのか、そのような指導をも含む、広い意味での「文法・文型指導」が必要となる。

したがって、中級レベルからは、文法・文型指導は、いっそう文章表現指導との関係を意識しつつ行われる必要があるのではないか。今回は特に、そのような観点から指導を考えることが大切だと思われる「だからといって」をとり上げる。

1 「だからといって」の一般的な記述

『学研国語大辞典』（1986）では、「だからといって」について独立した項目としての記載はない。だが、「からといって」に関しては、接続助詞「から」の項に以下のような記述がある。

<「からとて」「からって」「からといって」の形で>

{多くは打ち消しの「ない」を伴って}

イ ある態度をとる際の理由をあげるのに用いる。言いわけとして用いることが多い。

(1) 藤村・金子・伊丹 (1995)

「病気だからとて、会議に出なかった。」

「急用ができたからって、そそくさと出かけていったわ。」

□ ただそれだけの理由で... (することはない)

「手紙が来ないからといって、病気だとは限らんさ」

「相手が子供だからって、あまやかすことはないさ」

イの「からといって」は「といて」に「としゃべって」の意味あいが残っており、接続助詞化していないものと考えられるため、今回の接続助詞「からといって」に由来する「だからといって」の考察の対象とはしない。

『日本語教育事典』(1991)にも、接続助詞「から」の項に「『からといって』、及び、『からとて』の形で、後に打ち消し形を伴って、逆接条件を表す。」という記述があり、以下の例文が挙げられている。

「金持ちだからといって、いばってはいけない」

「簡単だからとて、あなどれない」

確かに、これらの例文も『学研国語大辞典』の例文も、「ない」という打ち消し形で終わっているが、これはこの種の文の生成に必須の条件なのだろうか。

2 日本語学習者の作文に現れた「だからといって」について

次に挙げる文は、約十ヶ月の日本語教育を終えた学生が、90分という制限時間で辞書や教科書を見ずに書いた作文に現れた「だからといって」の用例である。作文は、以下の意見に根拠を明示して反対するというものであった。

- ① 競争のない社会にするべきだ。
- ② 規則は厳しければ厳しいほどいい。
- ③ 厳しい規則はなくてもいい。
- ④ 何でも速ければ速いほどいい。

なお、本稿には誤字等は訂正したものの、基本的に学生が書いたままの文を載せるようにしたため、文法的な誤りと思われるものには.....をひいた。

(1)* ローマの政府は弱くなった末に、倒れてしまった。そのかわりに、新しく道徳を守っていたクリスト文明が始まったということである。

歴史上、ほかの例はまだたくさんある。こんなことに注意を払うべきである。だからといって、社会の中には、歴史の話を知っても、なんとなく道

徳やローマ文明がなんか我々の生活に関係がないといっている人さえいる。

(「厳しい規則はなくてもいい」に反対)

(2) * 厳しい規則があれば、人々は、犯罪した後の重い責任を持たねばならぬということを恐れて規則を守ることになると言える。このように、厳しい規則は警告する効果があると私は思う。だからといって、厳しい規則があっても人々が犯罪するという人がある。(「規則は厳しければ厳しいほどいい」に反対)

(3) ? 現在の社会は非常に速いスピードで進んでいる。何でも速ければ速いほど、いいと考える人がかなり多い。だからといって、私は何でも速くできれば、生活は、便利で豊かになるはずだとは思わない。

(「何でも速ければ速いほどいい」に反対)

(1)(2)では、前の文と後接文は逆接的な関係にあるが、文末に打ち消し形を伴っていない。意味の上から考えてみても、(1)の場合には、前の文で「べきである」と「私」の当為判断が強く押し出されているのに対して、後接文ではそれに同意しない人の存在が述べられているのであるから、「それなのに」「にもかかわらず」の方が適当だろう。(2)の場合は、前の文は「私の意見」で、後接文は「ある人々の意見」と、前後二文は意味的に対照をなしているため、「しかし」「だが」などに変えた方がよさそうだ。(1)(2)には訂正を要するという意味で*を付した。(3)の「だからといって」は「後に打ち消し形を伴って、逆接条件を表している」ものではあるが、書き手が前後の文の連結に「だからといって」を選択したことが適切だったとは言い難い。だが、(3)の場合、対照的な二文が連結されているにもかかわらず、(2)より許容度が高くなる。それは、(3)では前の文が「一般的な考え方」で後接文が「私の意見」と、(2)と反対の順序になっていることと、後接文のとりたての「は」を含む「とは思わない」という文末のためではなからうか。

こうみてくると、「だからといって」の文は、単に「後ろに打ち消し形を伴う」という説明でかたづけられる性質のものではなさそうだ。(2)

(2) 山口(1986)は、「からといって」の「といて」の部分が形式化した意味を表すに至っているものをⅡ類と名付け、「いて」が本来の「しゃべって」の意味を保持しているもの(Ⅰ類)から区別した。そして、このⅡ類をさらに「といて」の部分が逆接の意味でないものと逆接の意味のものに分け、それぞれⅡA類、ⅡB類と呼んだ。ところが、実際の用例に当たった結果、見方によってはⅡAともⅡBとも解しうるもの(ⅡAB)が最も多かったという。

この結果からもわかるように、逆接か、逆接でないか、単純には決められないというところにこそ、この「(だ)からといって」の本質があると思われる。

(4) ?... とにかく、競争のない社会にするべきではないと思う。だからといって、不正な手段による競争をするべきではない。我々人間は、競争しながらも、外の人の権利を侵さない方がいい。（「競争のない社会にするべきだ」に反対）

(5)... だから一面から見ると、競争はなくてはならないものだと言えよう。だからといって、激しい競争までしなければならないとは思わない。戦争のような激しい競争は社会の発展になくてもいい。（同上）

(4)と(5)をみても、(3)と同様「とは思わない」といういわば留保的な打ち消し表現を伴っている(5)と比べ、「～をするべきではない」と断定的な打ち消し表現を伴った(4)に違和感を感じる。したがって、「文末に打ち消し形を伴う」という記述は「だからといって」の文の生成に必要な条件ではあるが、「(だ)からといって」自体、及びその後接文の本質を捉えるのに十分な説明だとは言えない。更なる説明が必要である。それを実際の用例から考えてみたい。

3 後接文の文末から見た「だからといって」の7つの類型

「だからといって」が現れている実際の用例は、その後接文（以下「Q」）の文末によって、おおまかに次の7つの類型に分けることができた。

3-1 [P（前件）。だが、だからといって、Q（後件）とは思わない。⁽³⁾]

(6) 犯行の細部を別にすれば、私が裁判の傍聴ではじめて知った事実はほとんどない。家族がばらばらだったこと、友人たちとはうわべのつきあいしかなかったこと、祖父の死をさかいに態度が急変したこと、そして、突然突き上げるようにやってくる暴力的ふるまい。どれも耳にしていた。

だが、だからといって私はM被告のことがわかった、とは思わなかった。むしろかんじんなこと、いちばん重要なことがわからない、と痛感した。彼の心というもの、意識や精神の動きがわからない。そのことを私はひりひりする痛みのように感じとった。97.3.23 吉岡忍「まるでおとぎ話のように」朝日新聞

(6)では、最初の文に裁判の傍聴に行ったが、新情報は得られなかったことが書かれている。続く二文で既知情報の詳しい説明、そしてその情報を知ったのなら、それを根拠にM被告のことがわかったらろうというのが一般的、常識的な推論だ

(3) 接続助詞「PからといってQ」の場合、Pは前件、Qは後件と考えられる。この呼び方を接続詞「だからといって」の前の文、後接文にも適用する。

が、「..わかったとは、思わなかった」と「私」による否定的な判断が下される。

(6)の特徴は、「だが、だからといって」となっていることである。前後の逆接関係を表すためなら、「だが」だけで十分であるのに、「だが」と「だからといって」の両方が使われているのである。また「だが、だからといって」で導かれる後接文が「私はM被告のことがわからなかった」ではなく、「私はM被告のことがわかった、とは思わなかった」となっているのも特徴的である。後接文が「私はM被告のことがわからなかった」であれば、いわゆる逆接的な帰結となり、文は完結する。ところが、文末が「とは思わなかった」となっているために、「では、どう思ったのか」という疑問を投げかけ、その答えとして次の文、「むしろかんじんなこと、いちばん重要なことがわからない、と痛感した」を引き出し、さらにその後の展開に注目させる効果をもつことになるのである。

この2つの特徴から、前の文をP、後接文をQとすると、(6)は [P. だが、Q] [P. だからといって、Q (とは思わなかった)] が、統合されてできているとも考えられる。とすれば、「だが」が逆接的な接続の機能を果たし、「だからといって」の方は、帰結の文末に「とは思わなかった」という留保的な否定表現を要求して、後に続く文の重要性を示唆し、論の展開を促しているのではないかと。

実際、次の(7)のように「だからといって」単独でPとQを結びつけている例もあるが、(6)と同様、「とは思いません」という文末が「ではどう思うのか」という疑問を含意することになり、後の「お互いに平和を愛することを分かち合いたいと思う」というメッセージに至るまでの論の展開を後押ししているのである。

(7) 歴史はひとつではありません。その国、民族、文化、立場によって、歴史は違う見方を示します。日本と中国でも、それは同じです。だからといって、日本が中国に行った侵略という行為をごまかそうとは思いません。

私の学校では、世界史も日本史も近代を中心に教えています。.... (省略)

そのような授業を受けて、私たちは戦争について深く考えています。....

戦争が終わり、52年たった今、その罪の大きさばかりを問うのではなく、お互いに平和を愛する心を分かち合いたいと思います。そのために、戦争がしこりになるのなら、もっと話し合うべきです。日本の若い世代は、前向きに戦争を受けとめようとしています。それはとても勇気のあることと、わかって下さい。1997. 10. 29 朝日新聞投書欄 (以下「朝投」と記す)

そこで、先の(3)の文の「だからといって」の前に「だが」を加えると、文末の「とは思わない」も生き、「ではどう思うのか」という後の展開に注目を集められるようになる。(4)の文は「だが」を加え、後接文の文末を「とは思わない」とすれば「ではどうしたらいいのか」と論の展開を押し進める効果をもつ文となる。

(3)′ 現在の社会は非常に速いスピードで進んでいる。何でも速ければ速いほど、いいと考える人がかなり多い。だが、だからといって、私は何でも速くできれば、生活は、便利で豊かになるはずだとは思わない。

(4)′ …… とにかく、競争のない社会にするべきではないと思う。だが、だからといって不正な手段による競争(まで)するのがいいとは思わない。我々人間は、競争しながらも、外の人の権利を侵さない方がいい。

3-2 [P.しかし、だからといって、Qものではない etc。]

(6)に限らず、「だからといって」の用例には、前に「しかし」「が」「けれど」「でも」など、いわゆる逆接の接続詞、接続助詞が付いているものが多い。

(8) 私たちは、減税財源の確保のための消費税率引き上げはやむをえない、としてきた。しかし、だからといって「5%」が無条件に認められるものではない。

96.9.14 朝日新聞社説(以下「朝社」と記す)

Pの常識的な帰結であるQが「とは思わない」と、「私」によって否定的な判断を下され、「ではどう思うのか」という疑問を含意することになって、後に「私の考え」が展開されていく(6)(7)に比べ、(8)は「ものではない」という文末によって、一般的な道理に照らして、PからQが導かれてはならないという判断が下される。(8)では、前の文が消費税率引き上げに対する今までの国民の譲歩、後接文が前の文の譲歩を根拠とした更なる譲歩の要求、それを文末の「ものではない」によってきっぱり拒否しているのである。つまり、(8)は前の文の譲歩を根拠とした後接文の帰結の行き過ぎに反対しているわけであり、対比的逆接文ではなく、前の文と後接文の関係性に否定的判断を下している逆接文と理解するのが妥当であろう。そのことは、(8)から「しかし」を除いても叙述は成立するのに対して、「だからといって」をとると、論に飛躍があるかのような感じがでてくることによっても裏付けられる。実際に、同じようなトピックで「だからといって」のみで繋がれている(9)のような用例もある。

(9) すでに実施されている所得税・住民税減税の財源確保などを目的として、来年四月から消費税率を五％に引き上げることは、1994年の税制改革で、消費税法に書き込まれた。

だからといって、「五％は当たり前」という突き放した態度は納得できない。国民はこの三年余り、選挙を通じて政治に発言する機会がなかったのだ。

96.10.1 朝社

(10) .. 学歴偏重という大きな社会構造においては、自分の意志を大切にしようとする考えもすぐに押しつぶされてしまう。そこで、近ごろの中高生は授業と部活動の板挟みに遭っていると一般には考えられがちだが、だからといって、この夏休みに家族そろってどこかへ旅行に行けばよいという問題ではない。

96.8.16 朝投

(10)も、前の文の一般的な考え方を根拠に導かれるであろう帰結を、短絡的な解釈だと否定に傾いて判断している逆接文ととれる。後接文の文末「という問題ではない」は、Pを根拠に紋切り型の帰結Qが引き出され、論が進んでいくことを阻んでいるのである。このことは、さらに「だからといって」がPとQの間に割って入ることによって、論理のレベルから、前の文Pを根拠にQという帰結を引き出してくるその過程自体、つまり推論自体をも否定していると解釈できる。

3-3 [P.しかし、だからといって、Qは～とは/Qとは 言えない。]

ここまでは[P.だが、だからといって、Qとは思わない。]にしても、[P.しかし、だからといって、Qものではないetc.。]にしても、Qの文末に否定的な判断がくる用例をみてきたが、実際の用例には、いわば論を仕切り直すかのように、「Qというの」あるいは「Qということは」という形で帰結にあたる後接文を定題化し、その後否定的判断がきているというものがあつた。その中で、まず文末が「とは言えない」となっているものをみてみよう。

(11) かりに佐江が言ったように、偽札商売で、近松が中国人と組んで、大きな儲けを手にしたとする。城川組<暗殺グループ>⁽⁴⁾を秘かに動かせるというのは、まさにその証明でもあるのだが、だからといって用なしになった中国人をすべ

(4) 用例は文脈から切り離して提示するため、時には意味的な補足が必要となる。したがって、そのような補足を加える場合には<>で囲むこととする。

消すというのは、とても賢いやり方とは言えない。大沢在昌『北の狩人』

(12) 「ただどね、東条さんも最初から偉かったわけじゃないんだよ。どちらかと言え、陸軍のなかの冷飯食いだ。その彼が、軍の中枢部へ進出する足がかりをつかむことができたのは、ほかでもない、現在進行中の二・二六事件のおかげだ。二・二六事件の後皇道派が一掃されて、人事が大きく動いたからね」平田は陸軍省の方向を仰いだ。

「しかし、だからと言って、もし二・二六事件が成功していたら東条英機は現れなかったろう、ひいては戦争も起こらなかつただろうなんてことは、私には言えない。…」宮部みゆき『蒲生邸殺人事件』

(11)では、近松が暗殺グループを動かすことで、儲けを手にしたと仮定することは可能だが、その後で、用なしになった相棒の中国人をすぐ消したという推論は「賢いやり方とは言えない」という文末により否定される。否定されることによって、根拠自体、帰結自体の検証と、両者の関係、つまり推論の検証が促される。推論の検証とは、より高次から推論の妥当性に判断を加えることである。⁽⁵⁾と同時に、話の筋はそんなに単純ではない、背後には何か特別な事情があるという含みがでてきて、外の推論の余地がほのめかされる。

(12)は、東条が偉くなったのが二・二六事件の失敗のおかげなら、もし二・二六事件が成功していたら、東条は現れず戦争も起こらなかつただろうという仮定が可能になるが、その仮定的推論は「私にはそんなことは言えない」と否定されている。しかし、(12)は歴史と個人をテーマとした小説の一部で、平田というタイムトラベラーが、誤って二・二六事件の時代に連れてきてしまった主人公に、歴史を変えるために、後世悪人と評される人を過去に戻って暗殺するというような安易な解決法をとることを戒めている場面の言葉であることを考えると、前の文と後接文の関係づけに否定的な判断を下すことにより、他の推論の可能性を示唆して、真の結論を追求せよという指令を出しているともとれる。実際、小説の中では、この後、平田の、歴史を変えるためには、過去に戻って歴史を操作しようとしてもだめで、将来歴史となる今この時を誠実に生きることしかないのだと

(5) 藤田(1986)は、「だからといって」が二つの文をつなぐ位置にも現れ、後ろの文の文末に明確な否認の言葉を要求していることを指摘し、「『トイッテ』が二つの文の表す命題相互の関係について、より高次の判断を下す、判断の判断を示す形式の証左」としている。

いうメッセージが、主人公への伝言という形をとって述べられるのである。

こうみてみると、「だからといって」によって導かれるPからQへの過程は、より高次の論理の検証といったレベルからは否定的判断を下された推論で、Qはそうは言えないと判断されたいわば負の結論である。この負の結論は、明示され、強調されることにより、隠れた事情、また話者が導きたい真の結論を探せという指令になる。こうして[P. だからといって、Q.]はその後の部分に注目を集める効果を持つこととなり、Pの前提がどの程度の範囲かにもよるが、(11)(12)の小説などの長文においては、後にその文章全体の流れが収斂する大切な部分、または文章のメッセージがあることを示す、マーカーの働きをすることとなる。

3-4 [P. だからといって、Qことは／ことには 否定的判断。]

3-3の考察の結果を踏まえて、次は前後の文の関係性に、より高次からの判断を下す「だからといって」という観点から、逆接の接続詞と並置されていない用例を見ていきたい。

(13) また、日朝間には日本人の拉致疑惑をはじめとする難題が横たわっている。
だからといって、国際社会が北朝鮮の破局を避けながら開放体制への移行を促そうと努めるなかで、北朝鮮の深刻な状況にひとり背を向け続けることは、日本のとるべき選択肢ではない。 97. 9. 10 朝社

(14) いまの地価税に、いくつもの問題があることは間違いない。だからといって、いきなり凍結や廃止に動くことには反対だ。 97. 10. 20 朝社

(13)(14)の共通点は、(11)(12)同様、Qの部分が定題化されていることである。とりたてられたQの部分はいずれもかなり極端な行動なので、それを毅然として否定することを通して、より賢明な行動をとるよう勧めているようにとれる。

具体的には、(13)では、「難題がある」ことを理由に、いくつかある選択肢から「北朝鮮の深刻な状況に背を向ける」という極端な行動をとる選択肢を選ぶなど止めている。したがって、その後の論は「ではとるべき(賢明な)選択肢はどんなものか」という疑問に答える形で展開することが予測できる。

(14)は、「いくつもの問題がある」ことを理由に、それならいっそ「凍結や廃止に動」いてしまおうという極端な行動をとることに対して、否定的な判断を下している。これも(13)と同じように、「選択肢は外にもあるのに」という条件を

含意しており、後の論はいい意味での妥協点を求めて展開することが予想できる。

これらの例では、本来は「から」で結ばれているP（理由）とQ（行動）を、Qに極端な行動を想定してみて一旦それをとりたてた上で否定することにより、Pという些細な理由だけで、Qまでやってしまうことの愚かさが強調されている。

(15) コラムに登場してくれた彼女たちは、のびのびと働けない職場の実態を、怒り半分、あきらめ半分の口調で語ってくれた。女性だからというだけの理由で正当に評価してもらえないいらだち、チャンスを与えられない悔しさ、を。

一方で、彼女たちは「だからといって男の人みたいな働き方はイヤ」と口々に言う。総合商社のOLは、同僚の猛烈社員のことを「あんな風に二十四時間を会社にささげたくない」と話していたし、……

96. 12. 13 畑山美和子「会社は今も『オヤジの王国』」朝日新聞

(15)は女性にとって職場の実態はひどいものだ。でも、この文脈の中でいわば女性の対極にある男性ならいいのかといえば、「男の人のような働き方はイヤだ」と、前の文から引き出された仮定条件の当然の帰結としてでてくる解釈を退けている。ということは、(15)の「だからといって」の帰結は「では男の人ならいいのか」という対極の疑問を内包していると言える。実際に、そのような極を仮定する条件の形が顕在している用例もある。

3-5 [P. だからといって、Qでは／のでは 否定的判断。]

(16) 「核廃絶の時期を条約に明記せよ」というインドの基本姿勢には共鳴できるところがある。CATBには、核兵器の固定化につながりかねない側面があるからだ。だからといって、条約そのものをつぶしてしまつては、「角をためて牛を殺す」ことになってしまう。

96. 8. 16 朝社

(17) 政党の離合集散も、候補者が当選後に所属政党を変えることにも、何の驚きもなくなった。これもまた、投票の意味をわかりにくくしている。

だからといって、今の政治に背を向けたままで、投票所に足を運ばないというのでは、何も始まらない。

96. 10. 8 朝社

(16)(17)の共通点は、「だからといって」の後接文Qを一旦「では」という条件で受け、最終的に文末で否定的な判断を下していることである。「では」で受

けるQは極端な行為であり、一度極を仮定してみて、そこまでいってはだめだと判断した上で、よりわきまえた建設的な方法を探るよう示唆している。

具体的に言えば、(16)は核兵器の固定化を防ぐために、核廃絶の時期を条約に明記した方がいいが、それができないことを理由に、条約自体をつぶすところまで行ってしまうのはまずいと止め、より柔軟で賢明な態度をインドに求めている。(17)は投票の意味をわかりにくくしている条件を挙げ、行きたくなくなるのも無理はないとしながらも、実際に投票しないという行為を選択するまでに至るのは建設的態度ではないと止め、投票に行くよう勧めている。

(16)(17)の文は、形態的にQが条件文の前件ようになってはいるものの、文の特徴、その機能などは、Qが定題化されていた(13)(14)とほぼ同じである。

3-6 [P. だからといって、Q わけではない(とは限らない)。]

(18) 仁王はあたしが無茶をしても、あまり怒らない。それは怒るのを我慢してくれているのだ。怒れば、あたしが「女扱いされた」とつらい気分になるのを知っているからだ。だからといって、あたしの無茶に平気だったわけではない。

きつといつもあたしが危険のない仕事をするのを望んでいたにちがいないのだ。
大沢在昌『天使の涙』

(18)では、「仁王はあたしが無茶をしてもあまり怒らない」というP(行為)には、仁王の「あたし」に対する配慮があるのだから、Pという表面的な行為を根拠に「仁王があたしの無茶に平気だった」という対極にあたるQ(解釈)まで引き出すのは行き過ぎと話者が判断し、自省している。「だから～わけである」の「わけである」が後件の解釈を支持し、前件と後件の関係性に納得できたということを示す文末表現であることからすれば、「だからといって」が「わけではない」という否定的文末を要求して、前の文と後接文の関係性に否定的な判断を下すことになるのは当然であろう。(18)で「わけではない」の後に「正しい解釈はこちらなのだ」といわんばかりに「ちがいないのだ」という文末で終わる文が続くのも特徴的である。考察を行う前は「だからといって」の後接文には「わけではない」で終わるものが多いだろうと推測したが、実際には(18)のみであった。

(19) もちろん前もっていつ見学に行きたいということは伝えるが、保護者が来るからといって、いつもと違う保育をやるわけではない。この保育園の園長さ

んは保育に自信があるから、いつ保護者が見学に来ても歓迎なのである。

97.10.7 朝投

「わけではない」は、「からといって」が前件と後件を結ぶ接続助詞として使われる場合にはよく出現する。(19)はその一例であるが、保護者が来るという条件のもとで、いつもと違う保育をやるという一般的な傾向があることを意識しながら、その考え方をこの保育園に適用するのは誤りだと否定している。そして、「わけではない」で否定された文の後には、(18)と同じように、「のである」で終わる文が続いている。ただ、(18)と違うのは、「のである」がQに代わる正しい帰結のみを受けているのではなく「～から～」という正しい推論全体を受けていることである。つまり、この「～からといって～わけではない」は前件の検証、後件に対する否定的判断を単に繋いでいるものではなく、前件と後件で成り立つ推論全体に否定的判断を下しているものであると考えられる。

ところで、センターの学生の「反対意見を書く」という作文における「だからといって」の用例には、「わけではない」という文末を伴うものがわりに多い。

(20) 競争がないため、ゆったりした生活が可能になるかもしれない。だからといってこういう社会が住みやすいわけではない。というのは、人々の競争性は社会の発展だけでなく、個人の進歩も支えているからである。競争がないと、人々は怠け者になりかねない。人々の優れた脳も使われなくなるうち、退化するだろう。(「競争のない社会にするべきだ」に反対)

「反対意見を書く」という作文の場合、90分で「反対意見」を書かせるため、学生には反対しやすいように極端な命題が提示される。学生の意識の中には「いつもそうだというわけではない」「それほど極端なことを考えているわけではない」といった頻度副詞、程度副詞を否定する「わけではない」が定着しているので、極論には走らないが、ある程度そちらに傾いているということを表現するために「わけではない」という文末を選択するようである。また、中庸路線をいききたい学生の場合、一旦は反対するためにやむをえず極論を選ぶ。その後、それほど極端なことを考えているわけではないと「だからといって～わけではない」でバランスをとろうとする。自分の意見が極に傾かないよう、調整するのであろう。だが、極論には走らないと宣言して、自らの意見の範囲を限定したい時は「とは限らない」という文末を使うのが最も適切なのではないか。(20)の場合、前の文

が「かもしれない」という推量の文末表現で終わっているので、自分の判断を示す「とは思わない」か、限定を加える「とは限らない」の方がいいように思える。

(21) <競争がないと>将来の社会も発展し続けるどころか、かえってそのまままってしまうと見てよい。だからといって、競争は必ずしも、いい結果をもたらすとは限らない。激しい競争、殊に政治の面の権力の競争はただの競争でなく、戦争を始めさせてしまうことも珍しくない。(同上)

(22) 私は何でも速くできれば、生活は便利で豊かになるはずだという意見に反対である。というのは、生活が忙しくなりすぎて、セカセカするからである。

だからといって、スピードが何でも間に合わないほど遅過ぎるのがいいというわけではない。それに、何でも速くできれば生活は、便利で豊かになるとしても、末に失敗になることもあると考えられている。

(「何でも速ければ速いほどいい」に反対)

(22)は、(20)とは異なり、前の文の叙述を受けて、対極である「スピードが何でも間に合わないほど遅すぎる」というQをとりたてた上で、「わけではない」とその解釈に否定的な判断を下しているもので、このタイプの典型的な文であると言える。ただ、実際の用例(18)(19)のように、その後に「適切なスピードで行うことが大切なのである。」というような「のだ」文を加えてほしかった。

3-7 [P. だからといって、どうしてQ ない／る のか。]

(23) 事実を教えてください。第三次家永訴訟の報道を介して改めてこう強く思った。なぜ隠すのか、教えてくれないのか私には理解ができない。確かに南京大虐殺や従軍慰安婦問題、そして七三一部隊などの歴史は我々にとって恥ずべき事実である。しかし、だからといってその事実をどうして私たちの世代に教えることに抵抗を感じるのか、また教えようとししないのか。 97.9.2 朝投

(23)は文末が反語の「どうして～ないのか」であり、前の事態を根拠とした後ろの行為を読み手に投げかけることによって、後の論の展開を押し進める文となっている。それ故、(23)は、投書の冒頭の問題提起の文となっているのである。

4 まとめ

[P。だからといってQ。]の文では、PとQは逆接的な関係にあり、Qの文末は打ち消し形となる。しかし、PとQがともに事実であり、対比的な関係にあるときには、Aが肯定文、Bが否定文であっても「だからといって」は使えない。「だが」、「しかし」などが使われる。

Pが一般的な傾向、事象、そこから導かれるQが一般的、常識的な帰結、解釈である場合、「だからといって」の前に「だが」「しかし」などが出現することがある。この場合、「だが」「しかし」は常識的な帰結と書き手の引きだそうとする帰結が対比的な関係にあることを表し、「だからといって」の方は書き手の帰結が紋切り型の一般的なものではないということを示していると考えられる。また、「だが」「しかし」に逆接的な接続の機能を任せ、「だからといって」は文末に拒絶、禁止のような強い否定を伴ってQという帰結を阻止し、[P。だから、Q]という推論の検証を迫る機能を果たしていると考えられるものもあった。

[P。だからといってQ。]の文には大きく分けて二つのタイプがある。

一つは[P。だから、Q]という一般的、常識的な推論を「といて」が割り込むことにより検証した結果、否定し、真の帰結に至る新しい推論を追求させ、論の展開を促すタイプである。

もう一つは、Pを根拠として、極論Qを引き出し、この極端なQを一旦定題化、あるいは条件化することによって答えをやや留保した後、そこまでは行かないと否定する。そして、極に走るのはまずいという認識をつくった上で、穏当で賢明な意見に導くというタイプである。Qが極端な行為という場合もあり、その場合もQという極端な行為をとることをやはり定題化、あるいは条件化しておいて、それにおもむろに否定的な判断を下す。些細な理由からQまでやってしまう愚かさを強調することによって、より建設的な行為を求めさせることとなる。

後者のタイプの文で一旦極論をとりたてるのは、論が安直な一般化に流れることを防ぐためである。論の上で極に走るという形を取って、挑発し、あるいは明らかに極端だとわかる帰結に傾くポーズを取ってみて、穏当な意見に落ち着くよう導こうとするわけである。

P(根拠)、及びそれ以前の叙述に注目させる場合もないわけではないが、Qという帰結を否定することによって、その後の叙述Rに注目させることになる場合が多い。したがって、[P。だからといってQ。]はそれ以降の叙述に注意せよというマーカーとなる。

5 今後の課題

本稿では「打ち消し形を伴って、逆接条件を表す」という辞書の記述にこだわり、[P. だからといって、Q] の、Qの文末表現に着目して、考察をすすめてきた。

この考察の過程で、今度は視点を変えて、文末表現、例えば、「わけではない」などの特徴を明らかにするために、接続助詞「からといって」を考察する必要性を感じた。接続助詞と前件、後件との関係とえば、昨今、益岡(1997)等の複文の研究がめざましい成果をあげている。文の階層構造という観点から「からといって」で連結された文を分析してみるのも、大いに意味のあることだと思われる。

[P. だからといって、Q] の用例は数が少なかったため、十分な考察ができたとは言いがたいが、論の流れの中でこの種の文が果たしている役割が観察できたし、学生に教える際の留意事項が多少なりとも明確になったことは本稿のささやかな成果と言える。今後も論の流れをつくるための指導という枠組みから、作文などの production に無理なくつながる文法事項の教え方を考えていきたい。

参考文献

- 井島 正博 1993 「条件文の多層的分析」『成蹊大学一般研究報告』
- 江口 巧 1991 「条件文と理由文の交替について」『言語科学』第26号
- 奥田 靖雄 1986 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって」『教育国語』第87号
- 永野 賢 1952 「『から』と『ので』とはどう違うか」
『国語と国文学』第29号
- 益岡 隆志 1997 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 藤田 保幸 1986 「『～トイウト』『～トイエバ』と『～トイッテ』『～トイッテモ』—複合辞に関する覚書」『国語国文学報』第44号
- 藤村 知子・金子 比呂子・伊丹 千恵
1995 「橋渡しの中級作文教育—初級作文からレポート・論文へ」
『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第21号
- 山口 佳也 1986 「『からといって』について」『十文字学園女子短期大学研究紀要』第18号

THE TEACHING LOGICAL SEQUENCES
— FOCUSING ON A STUDY OF “ DAKARA-TO ITTE ” —

KANEKO Hiroko

The aim of this paper is to provide a mechanism for intermediate learners to manage logical sequences in writing Japanese. The conjunction DAKARA-TO ITTE, which comes from the conjunctive KARA-TO ITTE, has not been analyzed extensively, yet it plays an important role in the logical sequence of sentences in Japanese. Therefore, from a language teaching and learning point of view, this paper analyzes the structure of sentences connected using the conjunction DAKARA-TO ITTE in the formula: “P(the antecedent). DAKARA-TO ITTE Q(the consequence).” , as well as their functions in the logical sequence of sentences.

P.DAKARA-TO ITTE Q. type of sentences are divided into 7 varieties with special attention given to what follows Q, the consequence. The 7 varieties are as follows:

- 1) P.(DAGA) DAKARA-TO ITTE Q *towa omowanai*
- 2) P.(SHIKASHI)DAKARA-TO ITTE Q *mono dewanai*
- 3) P.(SHIKASHI)DAKARA-TO ITTE Q *wa/towa ienai*
- 4) P.DAKARA-TO ITTE Q *koto wa/koto niwa* negative judgment
- 5) P.DAKARA-TO ITTE Q *tewa/ho dewa* negative judgment
- 6) P.DAKARA-TO ITTE Q *wake dewanai(towa kagirana)*
- 7) P.DAKARA-TO ITTE *doushite Q noka?*

Using the formula described above and correcting errors made by students studying Japanese, some particular functions of P. DAKARA-TO ITTE Q. sentences can be clarified as follows:

- (1) DAKARA-TO ITTE negates common and stereotypical inferences connected by DAKARA, so as to lead readers to seek the correct inference.
- (2) DAKARA-TO ITTE suggests extreme consequence, from the antecedent, which are ultimately refuted. This process demands that the reader figure out the constructive consequence.

In both cases, P. DAKARA-TO ITTE Q. sentences indicate the importance of the text that follows them. Understanding the functions of P. DAKARA-TO ITTE Q. sentences is helpful for teaching logical writing.